

令和7年度
第3号



支援センターだより



〒780-0972 高知市中万々78 番地
高知県立高知ろう学校 相談支援部
電話 088-823-1640 FAX088-823-1752
E-mail : k-ro@g.kochinet.ed.jp



師走に入り、2学期も残すところあとわずかとなりました。運動会や修学旅行、学習発表会など行事の多かった2学期ですが、様々なことを経験するなかで、みんなと一緒に味わった喜びや感動、伝えたい思いなど、経験とともに豊かな心もはぐくまれているのではないかと思います。

支援センター便り第3号では、高知ろう学校の山中智子校長先生より、【言の葉（ことのは）】をお送りします。



【言の葉（ことのは）】

昨年の冬、『またの機会に』と締めくくったのですが、『またの機会』がきてしまいました。今回は、お約束どおり、『2歳の分かれ道』についてです。筑波技術大学障害者高等教育支援センター教授『長南浩人』先生のご講話で学ばせていただいたことを書かせていただきますね。

健聴児は2歳台になると「から」という「関係づけの言葉」を用いて、因果関係を表すことができるようです。

※膝にけがをした聴覚障害児が、教師にその部分を見せている場面で

教師「あー、ケガしたね。ケガ。血が出たね。これは何？血だね。保健室に行こう。」



※引用文献：『聴覚障害児の指導方法』長南浩人著



「関係づけの言葉」にするならば、「どうしたの？」「どこでけがしたの？」「走ったからころんだんだね。」などと投げかけるのかもしれませんが。健聴児には普通に話しかけていることも『語彙を増やさなくては！』と必死に名詞や事実の羅列をしていた自身を思い出します。

私たちが「関係づけの言葉」を伝えることが大切であるということは、私たち自身が言葉を磨いていく必要があるのだと思います。

さて、公開授業など積極的に実践されている学校も多くあると思います。「こう発問したら、当然、こう答えるよね。」と思っていても意図しない答えが返されることも見受けられます。「そんなこと聞いてない。」と落ち込むこともあります。授業がうまく流れたかだけでなく、教師の発問、子供の発話や反応への返し方をメモして授業者に戻すことも大切かと思います。授業をビデオに撮ると「どこ」「だれ」「どうした」の事実確認だけだったり、自分の話し方の癖や伝え方の不十分さだったりを振り返ることができます。振り返ることが言葉を磨くチャンスです。

現在、聾学校は、人工内耳装用児、補聴器装用児、重複障害児と多様な子供たちの教育環境を保障しなければなりません。文科省特別支援教育調査官 村上学氏の「なぜ聾学校を選んだのか」を考えると、「聾学校が好き」と子供が自分を発揮できる学校でありたいと思うのです。